

mamadas

ママダス

編集室 ☎092 (525) 6866

創刊号

発刊のごあいさつ

福岡で撮影、コピーライター、ディレクターと、ひとり3役をやっている間々田です。うちのたったひとりのスタッフ(早い話がカミさん)はライター、プランナー、ディレクターに食生活アドバイザーもやっていますが、それはともかく今月からたぶん月刊!というペースでわが事務所のニューズレターを仕事でお世話になった方、ご縁があった方にお届けすることにしました。

どういことをのせていくかという、取材先で見つけた珍しい風物とか、おいしいものとか、CDや本、映画の感想とか、うちの娘(中学生と高校生)の行動形態とか(若年層がなにに興味を示しているかがわかって親が見ても面白い)、嫌らしくない程度に今月させていただいた仕事も少しご紹介させていただき、間々田がどういうやつか、お伝えできればいいかなと考えています。

まずは創刊号をお届けします。よかったらご愛読ください。



◆ツルとかつどん◆

高校1年生と中学1年生。
わが家の二人娘の日常です。

EXILEってご存じですか? ふたりの歌うお兄さんとその後ろで踊るお兄さんのグループですね。ちょっとワルソーな雰囲気的面々ですが、昨年はすごいブレイクしました。高1の娘、ツルがその大ファン(ちなみに中1のニックネームはかつどん)。アルバムはもちろん、テレビ出演はCMまでチェック。雑誌も買いまくり。悲願のコンサートには、貯金を取り崩して行きました。けっこう大金使ってますよ。

ところが、その熱が急に冷めたんです。なぜかといえば、グループがさらに大所帯になったから。どうも弟分のグループを呑み込んだ形になり、それが面白くないらしい。メンバーも多過ぎて、名前が覚えられないとか。ふーん、そんなもんなんだ。

今月のOh! しごと

今、福岡市内の主要書店の店頭で積み上げられている「街ポケット3」(副題:ぐるりめぐる旅・時間)の「福岡てくてくカフェランチ」(春日出版)。この表紙、それに中面のお店紹介のうち20店舗ほどを実はわたくしが撮影させていただいてあります。ま、そんなことより、いやあ驚いたのはこんなアパートにカフェがつ!という意外性。よくありますよ、モルタル2階建てのやつ。わたしも大学時代にお世話になりましたが、そんな一部屋がさりげにカフェになっているんです。

オーナーは自分の個性をやさしく出しながら(やさしくってのが大事。押し付けではないんです)、ほんとマイペースでお店をやつてらっしゃる。そこにはもちろん、ゆるゆるの時間が流れていて(だからだらじやない、あくまでもゆるゆるです)、居心地がいい。あつ、こ学生んときの下宿そのままという感じのお店もあつて(畳敷き、



テーブルは卓袱台)、ごろんと横になりたくなってしまふ。で、隣の部屋ではおばあさんがほんと普通に暮らしているらしいです。この仕事ではそういったお店との出会いがいっぱいありました。詳しくは本を買っていただいて(残念ながら印刷税というものは入ってきませんが)、自分好みの店を探してみてください。きょうはあそこに行きたいからここの道歩こうかな、なんて散歩がきつと楽しくなりますよ。

もうカミングアウトしてしまいます。じ、実はッ、わたし、テツなんです。思えば、その兆しは幼少のころからありました。枕を山に見立て、その間に電車のおもちゃを走らせてはうきうき。もちろん、手で押して。

生まれが福岡の大牟田なので知っている人は知っている三井の企業線も身近にあつて、うっとり眺めていた記憶があります。

というわけで、そのへんの思い出も織りまぜながら、取材で訪れた地のテツ写真を順次公開。初回は肥薩線・嘉例川駅でのワンショットです。

頑固一鉄



一度、行きたかったんです! 嘉例川駅。すると、思いはかなうもので、なんと2回も仕事からみで行けました。



編集後記

力技と勢いで作った創刊準備号。それからなかなか作業が進まず、家内に尻をたたかれてやっとなか創刊号ができました。こんなんでも月刊で続けられるのかね。とにかく今後ともよろしくです。



撮って書く、撮って創る
フォトライターズオフィス

メニイデイズ

代表 間々田正行

〒810-0033
福岡市中央区小笹4丁目4-10
☎ 092 (525) 6866
FAX 092 (525) 6822
携帯 090 (1083) 1993
mail manydays@sky.plala.or.jp



山田深夜さんて知らない人の方が多いと思いますが、「本の雑誌」で「横浜Dブルース」が05年上半期ベスト10に選ばれた、新人の作家です。その作品が琴線に触れましてね。内容は横須賀に住むバイク乗りの話で、小気味よい人情話的なものが短編に仕立ててありました。で、もっと読みたいなと思って探したら前作が「千マイルブルース」だったんですね。現在、幻冬舎から文庫になって出ています。わたしも、もとバイク乗りで、ツーリングに出かけ

ていたんで共感できる部分、多々。詳しくは読んでいただくとして、思うに花村萬月さんの初期のものにも山田さんと同じにおいがしていました。あの方もバイクに乗るんでね。で、同じバイクの話でも少し違うにおいがするのが齊藤純さん。もっと違うのは片岡義男さん。ああ、その理由を書くスペースがない。しばらくはバイク小説に再び、はまりそうということで、お茶をにごしておきます。はは。

本のちよつと